

機関番号：32660

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20730486

研究課題名（和文） 無意図的想起の認知メカニズムに関する中断法を用いた実証的研究

研究課題名（英文） Examining mechanisms of involuntary memory by using an interruption method

研究代表者

森田 泰介 (MORITA TAISUKE)

東京理科大学・理学部・講師

研究者番号：10425142

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、思い出そうとする意図がないにもかかわらず、記憶がふと浮かんでくる現象、すなわち無意図的想起（小谷津・鈴木・大村，1992）の認知メカニズムを、これまで用いられてこなかった中断法を利用することにより解明すること、および日常場面における無意図的想起を制御するための知見を得ることにある。中断法を用いた実験及び調査により、無意図的想起の頻度がどのような要因により規定されているのかについての一端が明らかとなり、無意図的想起の認知過程に関する知見が得られた。

研究成果の概要（英文）：

The objectives of this study were to examine cognitive mechanisms underlying involuntary memory by using an interruption method, and to explore ways to control it in everyday life. Results obtained in experiments revealed the determinants of frequency of involuntary memory. For example, the level of arousal and anxiety were correlated to the frequency of involuntary memory. On the basis of these results, we discussed what mechanisms underlie involuntary memory and how to control it.

交付決定額

(金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合計
20年度	700,000	210,000	910,000
21年度	500,000	150,000	650,000
22年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・実験心理学

キーワード：不随意記憶，中断法，思考サンプリング，無意図的想起，認知メカニズム

科学研究費補助金研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

(1) 我々が記憶を活用する事態には、想起意図を伴って開始されるものと、想起意図を伴わずに開始されるものがある。前者の例としては、記憶実験のなかで、1週間前に呈示された単語を出来るだけ多く思い出そうとする、というものが挙げられる。後者の例としては、居間で寛いでいるときに、ふと、書類の提出期限が迫っていることを思い出す、というものが挙げられる。これらはそれぞれ、意図的想起、無意図的想起と呼ばれるものであり、いずれもが我々の日常場面における認知活動を支えている非常に重要なものである。しかしながら、後者に関する知見は、大いに不足している、もしくは、ほとんど蓄積されていないと言わざるをえないのが現状であった。その理由は、有効な検討方法の不在にあった。

(2) 無意図的想起とは、想起意図を伴わず、かつ、再現意識（過去に記録された記憶が再現されていることについての気づき）を伴う想起のことをいう。そして、無意図的想起を実験的検討の俎上に載せる場合には、(a) 想起意図を伴っていないこと、(b) 再現意識を伴っていることの2点が保証される必要がある。これらのうち、(b)の保証は、記憶実験の参加者に、再現意識（記憶を思い出したかどうか）についての内観報告を求めることによって容易に達成される。しかし、(a)の保証については、極めて困難なことであると考えられてきた。なぜなら、実験参加者に、記憶について尋ねるだけでそれは既に意図的な想起になってしまい、ふと浮かぶ記憶ではあり得なくなる、と考えられたからである。そのため、これまで無意図的想起の認知メカニズムに関する詳細な研究はほとんど行われ

ておらず、行われていたとしても、二次変数の統制に大きな問題を抱えた質問紙法か日誌法を用いたものであったため、詳細な認知メカニズムの解明につながるものは見あたらなかった。

2. 研究の目的

(1) 本研究の第1の目的は、無意図的想起の生起頻度が、いかなる要因によって規定されているのかについて、中断法を用いて解明することであった。具体的には、利用可能な認知的資源の量や方向づけ課題の種類、実験参加者の覚醒水準の高さなどを、検討の対象とした。

(2) 本研究の第2の目的は、無意図的想起が日常場面における我々の行動にいかなる影響を及ぼしているのかについて明らかにすることであった。具体的には、キャリア不安や時間的展望、展望的記憶課題の遂行（し忘れ）などを検討の対象とした。

(3) 本研究の第3の目的は、無意図的想起を下支えしている認知メカニズムがどのようなものかについて本研究で得られた知見に基づいて考察し、認知メカニズムに関するモデルを構築することであった。

(4) 本研究課題の第4の目的は、無意図的想起の制御方法について考察することであった。

3. 研究の方法

(1) 本研究で中心となる研究法は、中断法であった。中断法とは、実験参加者に何らかの作業を課しておき、任意のタイミングでその作業を中断させて、現在の意識内容について報告を求めるという方法である。もし意

識内容のなかに、再現意識を伴った情報が含まれており、しかもその記憶情報が想起意図によって開始された想起の結果、再現されたものでない場合には、無意図的想起が生起している、と見なすのである。

(2) 中断法を用いることにより、無意図的想起の実験方法が備えるべき条件(想起意図を伴っていないこと、及び再現意識を伴っていること)が保証されることになり、無意図的想起を実験的研究の対象とすることができるのである。

(3) ただし、日常場面での行動と無意図的想起との関連を明らかにする際に、中断法を用いることが困難な場合には、適宜従来の研究方法を採用した。

4. 研究成果

(1) 本研究の第1の目的は、無意図的想起の生起頻度の規定因を解明することであった。利用可能な認知的資源の量や方向づけ課題の種類等が無意図的想起の生起頻度に及ぼす影響につき実験を行ったところ、無意図的想起が生起したと報告されるためには、十分な量の認知的資源が必要となることが明らかになった。また、覚醒水準の高さが無意図的想起の生起頻度に及ぼす影響について検討したところ、全般的脱活性高群(「くつろいだ」・「ゆったりした」といった状態を経験している程度が高い群)は低群よりも過去の記憶についての無意図的想起を報告することが有意に多く、また、脱活性高群(「だるい」・「眠い」といった状態を経験している程度が高い群)は、低群よりも未来の予定についての無意図的想起を報告することが少ない傾向が見られることが示され、過去の出来事無意図的想起と未来の予定無意図的想起とが、覚醒水準の異なる側面によって

影響を受ける可能性が明らかとなった。

(2) 本研究の第2の目的は、日常場面における我々の行動に及ぼす無意図的想起の影響に関して検討することであった。キャリアに関する不安を経験する程度や、時間的展望、先延ばし傾向、展望的記憶課題の遂行の様相と、日常場面における無意図的想起の経験頻度との関係を検討したところ、特筆すべき結果として、展望的記憶課題の失敗の頻度と、無意図的想起の経験頻度との間に、有意な正の相関が見られることが明らかになった。これは、展望的記憶課題の成功に無意図的想起が貢献するという従来の考え方とは一致しない結果である。また、無意図的想起と時間的展望との関わりに関する検討の結果、未来の予定に関する無意図的想起が少ない者は、過去や未来よりも現在を重視するという時間的展望を持つことが多いことや、過去の出来事無意図的想起の頻度が高い者は、時間的展望の中で過去と未来とが十分に統合されていないことが多いことが示唆される結果が得られた。さらに、キャリア不安と無意図的想起との関わりに関する検討から、キャリア不安のなかでも、職業を決定することに対する不安と、過去の出来事無意図的想起を経験する頻度との間に有意な正の相関関係が見られることが明らかになった。

(3) 本研究の第3の目的は、無意図的想起を下支えしている認知メカニズムを考察することであった。十分な認知的資源が確保されない場合には、無意図的想起の生起が報告されにくくなるとの知見から、無意図的想起を下支えしている認知メカニズムとしては、自動的なものばかりでなく、制御的な過程が含まれていることを想定する必要があることが示唆される。これは、近年マインドワインダリングに関する研究から得られている知見と一致するものである。また、展望的記

憶課題の失敗の頻度と、無意図的想起の経験頻度との間に、有意な正の相関が見られた結果から、無意図的想起の生起メカニズム、特に未来の予定の記憶に関する無意図的想起の生起メカニズムには、展望的記憶課題の遂行を支える認知メカニズムと共通する部分が存在することが考えられる。

(4) 本研究課題の第4の目的は、無意図的想起の制御方法について考察することであった。無意図的想起の生起メカニズムに関する考察より、展望的記憶課題の遂行を支える認知メカニズムと類似した過程の関与が考えられたことから、展望的記憶課題の認知過程を制御する方法、特に自発的想起過程を制御する方法を用いることが、1つの有望な制御法として提案可能である。展望的記憶課題遂行時に必要とされる自発的想起を制御する方法としては例えば、手がかりの性質を変化させたり、保持期間中にリマインダを呈示したり、保持期間中の方向づけ課題を変化させたりするなどの方法を挙げることができる。今後はこれらの方法を用いることにより無意図的想起の頻度を意図的に制御することができるのかについて検討していくことが必要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

1. 森田泰介 展望的記憶課題と無意図的想起及び活動-状態指向性との関連性, 岡山学院大学・岡山短期大学紀要, 査読有, 31 巻, 2008 年, 41-46

[学会発表] (計 11 件)

1. 森田泰介, 予定の想起に伴う感情に関する調査的検討, 日本認知心理学会第 9 回大会, 2010 年 5 月 28 日, 学習院大学
2. Morita, T., Involuntary memories and prospective memory failures: A diary study, 9th Tsukuba International

Conference on Memory, 7 May 2011, Tsukuba Japan.

3. 森田泰介, 展望的記憶課題遂行時の無意図的想起の規定因 日本心理学会第 74 回大会, 2010 年 9 月 22 日, 大阪大学
4. 中田英利子・森田泰介, リアリティモニタリングエラー傾向質問紙の作成および信頼性・妥当性の検討, 日本心理学会第 74 回大会, 2010 年 9 月 22 日, 大阪大学
5. Morita, T. & Kawaguchi, J. Involuntary memory experience questionnaire: Examining the relationship between prospective memory and involuntary memory, 3rd International Conference on Prospective Memory, 28 July 2010, University of British Columbia, Canada.
6. 森田泰介, 展望的記憶課題の保持期間におけるマインドワンダリング, 日本認知心理学会第 8 回大会, 2010 年 5 月 29 日, 西南学院大学
7. Morita, T., Time course of mind wandering in time-based prospective memory, 8th Tsukuba International Conference on Memory, 30 May 2010, Tsukuba Japan.
8. 森田泰介, 無意図的想起の生起頻度に及ぼす覚醒水準の効果, 日本心理学会第 73 回大会, 2009 年 8 月 28 日, 立命館大学
9. 中田英利子・森田泰介, 日常場面におけるソースモニタリングエラーに関する日誌法による検討, 日本認知心理学会第 7 回大会, 2009 年 7 月 20 日, 立教大学
10. 森田泰介, 予定記憶の想起順序と予定間の類似性との関連性, 日本認知心理学会第 6 回大会, 2008 年 5 月 31 日, 千葉大学
11. 森田泰介, 展望的記憶・回想的記憶の無意図的想起と時間的展望との関連性, 日本心理学会第 72 回大会, 2008 年 9 月 19 日, 北海道大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森田 泰介 (MORITA Taisuke)

東京理科大学・理学部・講師

研究者番号: 10425142